

# 物理学の95パーセント

森田 紘平\*

95 per Cent of Physics

Kohei MORITA

私は2012年4月に京都大学大学院科学哲学科学史専修に進学し、2020年3月の博士号取得までの約9年間伊藤先生にお世話になり、最終的には博士号の副査まで担当していただきました。科学史を専門とする訳ではありませんし、先生の研究活動の評価をする立場にはないので、思い出深い話をいくつか紹介させていただければと思います。

伊藤先生には大変お世話になりました。それは当時物理学を対象とする院生が少なかったからかもしれませんし、私の修士の研究は科学史寄りの研究だったからかもしれません。あるいは、私のプライベートな事情に同情していただいたのかもしれないし、文学部から、物理学が大してできないのに進学してきた私を心配していただいたのかもしれない。今となっては知るよしもありませんが、気にかけてはいただいていたのだらうと思います。私の初めての学会発表は伊藤先生に誘っていただいた科学基礎論学会のワークショップでした。

伊藤先生から学んだことを言語化することは困難ですが、勉強になったお話を紹介させていただきます。物理学者で量子力学の創始者の一人であるニールス・ボーアの論文を英語で読む授業がありました。いわゆる演習の授業であるように、一文ずつ訳していくという形式でした。よく知られているようにボーアの議論は難解で、英語が彼の母語ではないこともあり、決してわかりやすいものではありませんでした。参加者の一人がその英文を意味が通るように訳したところ、「そこは文法上そうは読めない」と伊藤先生が指摘されたことがありました。参加者の翻訳の方が、現代の量子力学の理解を踏まえると確かにわかりやすくはなっていました。しかし、伊藤先生はそれでよしとはせず、あくまで原文に忠実に訳すことを求めていらっしました。授業の一場面ですが、印象深く残っています。科学史として文献を読む以上は、その原文に忠実であるようにという誠実な姿勢は私の規範となっています。

---

\* 日本学術振興会・名古屋大学情報学研究所

また、学生が卒論や修論などの進捗報告や学会発表の予行などを行うセミナーの授業（いわゆるゼミ）でのやりとりで印象に残っていることがあります。元々は量子力学の哲学を専門に研究していたのですが、博士課程に進学後からは徐々に関心や専門が熱統計力学へと移っていく際に、臨界現象におけるくりこみ群の哲学の発表をする機会がありました。その際に、「物理学の哲学で話題になるのは、物理学全体の5%くらいだよ。ミクロな領域の2.5%とマクロな領域の2.5%。」とおっしゃられたことは記憶に残っています。この指摘が的を射たものであることは、物理学の哲学の知識がある人であればわかるのではないのでしょうか。物理学の哲学で話題になっているのは、特に国内に限ると、量子力学や時間空間、またはそれらの基礎づけであり、それ以外の物理学の主要な大部分はあまり顧みられていません。つまり、物理学の哲学がその名に反して、極めて限定的なことしか話題にしていないということを指摘していらっしやいました。先生のこの指摘には今でも首肯するばかりで、より幅広い物理学を対象とできるようになりたいと思いました。実際、その後の執筆した博士論文や、現在の研究では残りの95%の物理学の中から事例を見出し分析しているつもりです。ただ、今の自分の研究を先生に紹介しても、「まだまだ狭いよね」と言われてしまうかもしれません。

授業外でも、私が研究活動の相談に伺うと、いつでも歓迎してくださり、学術的な話だけでなく、私生活のことや、ここでは書けないような話もしていただきました。中でも望遠鏡の使い方などをレクチャーするために大学近くの小学校のイベントに参加していらした頃には、「退職して小学校の教員でもやろうかな」と冗談混じりにおっしゃられていたことを思い出します。他にも色々な話がありますが、せっかくなので自分の胸にしまっておこうと思います。

記憶をたどり整理していくにつれ、もういらっしやらないのだなと思うと悲しい気持ちになります。最後になりますが、伊藤先生のこれまでのご指導に深謝し、心からお悔やみを申し上げます。